



高知県初記録のアカハタ属魚類 3 種 (シラヌイハタ・アカマダラハタ・アカハタモドキ)

橘 皆希¹・遠藤広光¹

Author & Article Info

¹ 高知大学理工学部海洋生物学研究室 (高知市)
MT: miibai.harima@gmail.com (corresponding author)
HE: endoh@kochi-u.ac.jp

Received 21 July 2026
Revised 25 July 2026
Accepted 26 July 2026
Published 28 July 2026
DOI 10.34583/ichthy.69.0_53

Minaki Tachibana and Hiromitsu Endo. 2026. First records of three groupers, *Epinephelus bontoides*, *E. fuscoguttatus*, and *E. retouti*, from Kochi Prefecture, Japan. Ichthy, Natural History of Fishes of Japan, 69: 53–59.

Abstract

Three species of the grouper genus *Epinephelus* Bloch, 1793 (Epinephelidae) were collected from Kochi Prefecture, Japan: *Epinephelus bontoides* (Bleeker, 1855), *E. fuscoguttatus* (Forsskal, 1775), and *E. retouti* Bleeker, 1868. Among them, the first and the latter two are widely known from the Indo-West Pacific and the Indo-Pacific, respectively. In Japanese waters, the first two were known from Shizuoka and Mie prefectures southward to the Nansei Islands, and the last was recorded from the Ogasawara Islands, the Zunan Islands, and the Nansei Islands. However, no species has been reported from Kochi Prefecture. Thus, the present specimens represent the first records of these species in Kochi Prefecture, and the northernmost range extension for *E. retouti*.

ハタ科アカハタ属魚類 *Epinephelus* Bloch, 1793 は世界で約 90 種、日本からは 44 種が知られ、インド・太平洋の熱帯から亜熱帯水域を中心に、東部太平洋や大西洋にも分布する (Parenti and Randall, 2020; 中村・本村, 2022, 2025; 中村ほか, 2026; 本村, 2026). 本属魚類は多様な形態をもつことから、その特徴を定義することが困難とされ、日本産の種では口蓋骨歯がある、背鰭棘数が 11、臀鰭軟条数が通常 8、腹鰭起部が胸鰭基底部の直下もしくは後方に位置するなどの特徴から同科他属とおおむね識別される (Heemstra and Randall, 1993; 瀬能, 2013; 中村・本村, 2022).

2023 年から 2025 年にかけて、本属に含まれるシラヌイ

ハタ *Epinephelus bontoides* (Bleeker, 1855), アカマダラハタ *Epinephelus fuscoguttatus* (Forsskal, 1775), およびアカハタモドキ *Epinephelus retouti* Bleeker, 1868 の 3 種が高知県西南部から採集された。日本国内において、シラヌイハタとアカマダラハタはそれぞれ静岡県以南と三重県以南の太平洋沿岸、および南西諸島に、アカハタモドキは小笠原諸島、豆南諸島、および南西諸島に分布するが、いずれの種も高知県から記録がない (瀬能, 2013; 畑・本村, 2015; 木村ほか, 2017; Motomura and Uehara, 2020; 下瀬, 2021; 栗岩, 2022; 笹木ほか, 2025; 中村ほか, 2025). そのため、各種を標本に基づき高知県初記録としてここに報告する。これらのうち、アカハタモドキは分布の北限を更新する。高知県における本属魚類の記録は、これら 3 種を含めて 35 種となる (橘・遠藤, 2023; 本研究).

材料と方法

観察標本の計数・計測方法は Randall and Heemstra (1991) に、ハタ科内の分類体系は中村・本村 (2022) にそれぞれしたがった。側線有孔鱗数 (lateral-line scales) と縦列鱗数 (longitudinal scale rows) は、サイアニンブルーで染色後に双眼実体顕微鏡を用いて計数した。計測はアナログノギス、デジタルノギス、およびディバイダーを用いて 0.01 mm 単位までおこない、小数第 2 位を四捨五入した。標準体長は体長または SL と略記した。アカハタモドキの標本では、背鰭最終棘である第 12 棘が損傷していたため計測しなかった。計測形質は体各部の体長に対する割合で示した (Table 1). 標本の作製、登録、撮影、および固定方法は、本村 (2009) にしたがった。観察標本はすべて高知大学理工学部海洋生物学研究室 (BSKU) に保管されている。そのほか、BPBM はビショップ博物館、NSMT は国立科学博物館の研究機関略号である。

Epinephelus bontoides (Bleeker, 1855)

シラヌイハタ

(Fig. 1; Table 1)



Fig. 1. Fresh specimen of *Epinephelus bontoides* (BSKU 137095, 36.8 mm SL) from Kochi Prefecture, Japan.

標本 BSKU 137095, 体長 36.8 mm, 高知県幡多郡大月町, 平山川河口付近, 2024 年 9 月 20 日, 手網, 難波拓登.

記載 体は楕円形で側扁する. 体高はやや低く, 背鰭第 2 棘基部付近で最大となり, 体長は体高の 3.2 倍. 体背縁は吻端から背鰭第 4-5 棘基部付近まで上昇し, そこから尾柄部まで緩やかに下降する. 体腹縁は下顎前端から腹鰭起部にかけて下降し, 腹鰭から臀鰭起部の間はややへこみ, そこから尾柄部まで緩やかに上昇する. 口は端位で吻端は尖り, 下顎前端が上顎前端よりわずかに突出する. 上顎後端は円みを帯び, 眼窩後端の直下をわずかに越える. 両鼻孔は互いに接近し, 吻上部の眼窩直前に位置する; 前鼻孔は円形で皮弁が発達し, 後鼻孔は楕円形. 両顎には配列が不規則な円錐歯帯があり, 歯帯は顎の前部ほど幅広い; 円錐歯は内側にやや湾曲し, 上顎前部では肥大する. 鋤骨と口蓋骨に歯がある. 前鰓蓋骨後縁は粗い鋸歯状で, 下縁はおおむね平滑. 主鰓蓋骨棘は 3 本で, 中央の棘が最も強大; いずれの棘も露出する (上方の棘は先端のみ). 体はおおむね櫛鱗 (一部は円鱗) で被われ, 両唇, 吻部と眼窩の前縁, および胸鰭腋部は無鱗. 側線鱗は管をもち, 開口部は単一. 肛門は背鰭第 9 棘基部のほぼ直下に位置する. 尾柄はやや太短く, 尾柄長が尾柄高の 1.6 倍. 背鰭起部は鰓蓋上端のやや後方に位置する. 背鰭棘条間の鰭膜は浅く切れ込み, 背鰭軟条部の縁辺は円みを帯びる. 背鰭棘は第 3 棘が最長で, 第 4-10 棘はほぼ同長. 背鰭軟条は第 9 軟条が最長. 胸鰭基底上端は背鰭第 2 棘基部のほぼ直下に位置し, 胸鰭後縁は円みを帯びる. 臀鰭起部は背鰭第 1 軟条基部のほぼ直下に位置し, 臀鰭軟条部の縁辺は円みを帯びる. 臀鰭軟条は第 3 軟条が最長. 腹鰭起部は背鰭第 3-4 棘基部の直下に位置する. たたんだ腹鰭の後端は肛門を越える. 尾鰭は円形.

色彩 生鮮時 (Fig. 1) — 頭部と体側の地色は褐色で,

体側の上部は緑みを帯び, 腹部は淡褐色. 両唇を除く頭部および腹部を除く体側に濃褐色から赤褐色の円形からやや横に長い楕円形の斑点が散在し, 体側後半部では色味が薄くなる. 頭部の両唇は灰白色でその下部周辺は白色. 項部は黒褐色. 背鰭の地色は灰褐色で, 背鰭棘条部の前部は黄みを帯び, 軟条部の下半部は暗褐色. 背鰭全体に黒褐色から赤褐色の斑点が散在し, 軟条部の斑点はやや小さい. 臀鰭の地色は灰褐色. 臀鰭軟条部の基底付近は暗褐色で黒褐色から赤褐色の斑点がある. 尾鰭の地色は灰褐色. 尾鰭の基底から上下縁を除く中央部付近は暗褐色で, やや小さな黒褐色から赤褐色の斑点が散在する. 胸鰭は暗褐色で下部ではやや淡く, 後方は緑みを帯びる. 腹鰭は白色で第 3-5 軟条上に褐色から淡褐色の斑点がある. 背鰭軟条部の上縁と尾鰭の後縁には白色の, 胸鰭後縁には白色半透明の縁取りがある.

固定後 — 頭部, 体側, および各鰭に散在する斑点は顕著に残る. ただし, 赤褐色の斑点は退色し, 褐色になる.

分布 本種はインドから日本, ソロモン諸島にかけてのインド・西太平洋に分布する (Randall and Heemstra, 1991; Heemstra and Randall, 1993; Heemstra and Myers, 2011; Akhilesh et al., 2021). 日本国内では静岡県, 三重県, 高知県, 宮崎県, 鹿児島県本土, 大隅諸島, 甌島列島, 奄美大島, および沖縄諸島から記録がある (瀬能, 2013; 鎭木, 2016; 木村ほか, 2017; 桜井, 2019; 中村ほか, 2019, 2025; 荒井・佐藤, 2021; 三木, 2021; 中村, 2022; Motomura, 2023; Koreeda and Motomura, 2025; 笹木ほか, 2025; 笹木, 2025; 吉郷, 2026; 本研究).

備考 本標本は胸鰭軟条数が 19, 側線有孔鱗数が 50, 縦列鱗数が 85, 総鰓耙数が 20, 尾鰭が円形, 両唇を除く頭部, 腹部を除く体側, 背鰭, 臀鰭, 尾鰭に濃褐色から赤褐色の斑点が散在する, および背鰭軟条部, 胸鰭, 尾

鰭の縁辺に白色の縁取りがあるなどの特徴が、Randall and Heemstra (1991), 栗岩ほか (2008), および Heemstra and Myers (2011) が示したシラヌイハタ *E. bontoides* の標徴と一致したため、本種に同定された。本標本の背鰭軟条数は18であり、既知の変異幅である16–17から外れるが、同属他種の背鰭軟条でも2本程度の変異が認められるため、これを種内変異と判断した (Randall and Heemstra, 1991: table 2; 栗岩ほか, 2008; 瀬能, 2013)。本種の分布記録は前記のとおりであり、本標本は本種の高知県からの初記録となる。

本種は水深30 mまでの岩礁帯や泥底帯、および岩や礫が散在する砂浜海岸付近に生息し、汽水域にも出現する (Randall and Heemstra, 1991; Heemstra and Randall, 1993; 栗岩ほか, 2008; Heemstra and Myers, 2011; 瀬能, 2013; 中村ほか, 2019; 荒井・佐藤, 2021)。本種の若魚は、中村ほか (2019) により岩が点在する砂浜海岸に生息すると推測された。一方、本標本は橘・遠藤 (2023) が報告したホシヒレグロハタ *Epinephelus corallicola* (Valenciennes, 1828) や後述のアカマダラハタと同様に、大月町の平山川河口付近の転石帯から採集された。そのため、シラヌイハタは体

Table 1. Counts and measurements of three species of *Epinephelus* from Kochi Prefecture, Japan.

	<i>E. bontoides</i> BSKU 137095	<i>E. fuscoguttatus</i> BSKU 134705	<i>E. retouti</i> BSKU 138003
Standard length (SL, mm)	36.8	79.4	271.5
Total length (mm)	46.3	99.9	323.2
Counts			
Dorsal-fin rays	XI, 18	XI, 14	XII, 15
Anal-fin rays	III, 8	III, 8	III, 8
Pectoral-fin rays	19	19	19
Pelvic-fin rays	I, 5	I, 5	I, 5
Lateral-line scales	50	56	72
Longitudinal scale rows	85	105	118
Gill rakers	7 + 13 = 20	11 + 17 = 28	8 + 14 = 22
Measurements (% SL)			
Body depth	31.0	34.8	35.7
Body width	14.0	17.3	17.6
Head length	41.2	41.9	39.8
Snout length	7.9	9.7	11.5
Orbit diameter	11.6	7.8	7.9
Interorbital width	4.0	5.8	6.5
Suborbital depth	2.0	3.2	3.6
Upper-jaw length	18.8	21.2	16.0
Caudal-peduncle depth	11.5	12.9	10.3
Caudal-peduncle length	18.2	13.5	16.8
Pre-dorsal-fin length	36.9	40.4	39.0
Pre-anal-fin length	67.5	71.8	72.0
Pre-pelvic-fin length	40.4	39.4	42.4
Dorsal-fin base length	62.9	56.4	56.2
1st dorsal-fin spine length	6.4	6.8	4.5
2nd dorsal-fin spine length	12.0	11.6	8.0
3rd dorsal-fin spine length	13.8	13.2	10.0
4th dorsal-fin spine length	13.6	13.8	10.9
5th dorsal-fin spine length	13.5	13.5	10.9
6th dorsal-fin spine length	13.5	13.8	10.4
7th dorsal-fin spine length	13.5	13.4	10.0
8th dorsal-fin spine length	13.5	13.5	9.7
9th dorsal-fin spine length	13.5	13.4	9.6
10th dorsal-fin spine length	13.5	13.4	9.5
11th dorsal-fin spine length	14.0	13.4	10.0
Length of longest dorsal-fin ray	18.6	18.6	15.1
Anal-fin base length	19.4	16.6	17.4
1st anal-fin spine length	7.9	6.5	5.0
2nd anal-fin spine length	13.4	11.2	10.2
3rd anal-fin spine length	13.9	11.1	10.8
Length of longest anal-fin ray	20.5	18.4	18.6
Caudal-fin length	26.8	24.0	19.4
Pectoral-fin length	24.7	22.0	20.9
Pelvic-fin spine length	12.5	11.4	9.5
Pelvic-fin length	21.1	19.4	18.9



Fig. 2. Fresh specimen of *Epinephelus fuscoguttatus* (BSKU 134705, 79.4 mm SL) from Kochi Prefecture, Japan.

サイズに因らず多様な環境に生息すると考えられる。

本種は栗岩ほか（2008）により日本で初めて記録されて以降，前記した分布のとおり特に 2010 年代後半から国内で数多くの報告がある．中村ほか（2025）は種子島において多様な体サイズの本種が得られていることから，同島の周辺海域で再生産し，黒潮により大隅諸島以北へ輸送された可能性が高いとした．そのため，高知県産の個体も種子島周辺海域から黒潮の影響により偶来したと考えられる。

Epinephelus fuscoguttatus (Forsskal, 1775)

アカマダラハタ

(Fig. 2; Table 1)

標本 BSKU 134705，体長 79.4 mm，高知県幡多郡大月町，平山川河口付近，2023 年 10 月 28 日，手網，難波拓登。

記載 体は楕円形で側扁する．体高はやや高く，背鰭第 2 棘基部付近で最大となり，体長は体高の 2.9 倍．体背縁は吻端から背鰭起部付近まで上昇し，そこから尾柄部まで緩やかに下降する．体腹縁は下顎前端から腹鰭起部にかけて下降し，腹鰭から臀鰭起部の間はややへこみ，そこから尾柄部まで緩やかに上昇する．口は端位で吻端は丸みを帯び，下顎前端が上顎前端よりわずかに突出する．上顎後端は丸みを帯び，眼窩後端の直下を越える．両鼻孔は互いに接近し，吻上部の眼窩直前に位置する；前鼻孔は円形で皮弁が発達し，後鼻孔は楕円形．両顎には配列が不規則な円錐歯帯があり，歯帯は顎の前部ほど幅広い；円錐歯は内側にやや湾曲し，上顎前部では肥大する．鋤骨と口蓋骨に歯がある．前鰓蓋骨後縁は細かい鋸歯状で，下縁はおおむね平滑．主鰓蓋骨棘は 3 本で，中央の棘が最も強大；上方

の棘は全体が皮下に埋没；中央の棘は露出；下方の棘は基部が埋没し，先端のみ露出する．体はおおむね櫛鱗（一部は円鱗）で被われ，両唇，吻部と眼窩の前縁，および胸鰭腋部は無鱗．側線鱗は管をもち，開口部は単一．肛門は背鰭第 11 棘基部のほぼ直下に位置する．尾柄は太短く，尾柄長が尾柄高の 1.1 倍．背鰭起部は鰓蓋上端のやや後方に位置する．背鰭棘条間の鰭膜は浅く切れ込み，背鰭軟条部の縁辺は丸みを帯びる．背鰭棘は第 4 棘が最長．背鰭軟条は第 7 軟条が最長．胸鰭基底上端は背鰭起部直下のわずかに前方に位置し，胸鰭後縁は丸みを帯びる．臀鰭起部は背鰭第 2 軟条基部のほぼ直下に位置し，臀鰭軟条部の縁辺は丸みを帯びる．臀鰭軟条は第 4 軟条が最長．腹鰭起部は背鰭第 2 棘基部の直下に位置する．たandan腹鰭の後端は肛門に達しない．尾鰭は円形．

色彩 生鮮時 (Fig. 2) — 頭部と体側の地色は褐色で，黒褐色から褐色の斑点や斑紋が密に分布し，網目模様を形成する．下顎の下方に 2 本，上顎後端の後方に 1 本の明瞭な白色斜線がある．体側には不定形の黒褐色から濃褐色の斑紋が連なった不連続な帯が 5 本ある．尾柄部の背面には黒色斑紋がある．胸鰭を除く各鰭の地色はくすんだ淡褐色から橙みを帯びた淡色で，不定形の黒褐色から濃褐色斑紋が分布し，縁辺は灰色半透明の緑取りがある．胸鰭はやや赤みを帯び，全体に不規則な濃褐色帯が走る．

固定後 — 頭部，体側，および各鰭に散在する斑点や斑紋は顕著に残る．各鰭の赤色や橙色は退色し，青みや黄みを帯びた白色になる．

分布 本種は紅海およびモザンビーク以北のアフリカ東岸から日本，サモア，フェニックス諸島にかけてのインド・太平洋に広く分布する (Randall and Heemstra, 1991; Heemstra and Randall, 1993; Cornish, 2011; Akhilesh et al.,

2021). 日本国内では三重県、高知県、種子島、奄美大島、沖縄諸島、および八重山諸島から記録がある(瀬能, 2013; 畑ほか, 2016; 鎗木, 2016; 下瀬, 2021; 中村ほか, 2021; 栗岩, 2022; Motomura, 2023; 笹木ほか, 2025; 笹木, 2025; 吉郷, 2026; 本研究). Fujiwara and Motomura (2020) は文献調査により本種が喜界島に分布するとしたが、本種の分布を再整理した中村ほか (2021) によりマダラハタ *Epinephelus polyphekadion* (Bleeker, 1849) の誤同定とされたため、同島からの本種の記録はない。

備考 本標本は背鰭軟条数が 14、胸鰭軟条数が 19、側線有孔鱗数が 56、縦列鱗数が 105、総鰓耙数が 28、尾鰭が円形、頭部や体側に黒褐色から褐色の斑点や斑紋が密に分布し、網目模様を形成する、尾柄部背面に黒色斑紋がある、および胸鰭が赤みを帯びるなどの特徴が、Randall and Heemstra (1991), Cornish (2011), および畑ほか (2016) が示したアカマダラハタ *E. fuscoguttatus* の標徴と一致したため、本種に同定された。本種の分布記録は前記のとおりであり、本標本は本種の高知県からの初記録となる。

本種の成魚は頭部背縁が眼の後方でへこみ、項部が盛り上がる特徴をもつ (Randall and Heemstra, 1991; 瀬能, 2013; 畑ほか, 2016)。一方、本種の若魚の項部は直線的で滑らかである [Randall and Heemstra, 1991: pls. XIII-D, XXXV-G (BPBM 26789, 体長 120 mm; BPBM 34257, 体長 69 mm)]。本標本も体長 79.4 mm の若魚であり、後者の特徴を示す。そのため、同様に頭部背縁が丸みを帯び、色彩的特徴が共通するマダラハタとよく似るが、本種は胸鰭軟条数がやや多く 18–20 (vs. マダラハタではやや少なく 16–18)、総鰓耙数が多く 28–31 (vs. 少なく 24–27)、および胸鰭が赤みを帯びる (vs. 淡色または暗色) などの特徴の組み合わせで識別できる (Randall and Heemstra, 1991; Heemstra and Randall, 1993; Cornish, 2011; 瀬能, 2013; 畑ほか, 2016)。

本種は水深 60 m までの岩礁帯やサンゴ礁帯に生息し、稚魚や若魚は藻場やマングローブ域でもみられる (Randall and Heemstra, 1991; Heemstra and Randall, 1993; Cornish, 2011; 瀬能, 2013)。本標本は上記のシラヌイハタと同所の河口の転石帯から採集された。

Epinephelus retouti Bleeker, 1868

アカハタモドキ

(Fig. 3; Table 1)

標本 BSKU 138003, 体長 271.5 mm, 高知県宿毛市沖の島近海, 水深 100–120 m, 2025 年 1 月 18 日, 釣り, 中村桐人。

記載 体は楕円形で側扁する。体高はやや高く、背鰭第 3–4 棘基部付近で最大となり、体長は体高の 2.8 倍。体

背縁は吻端から背鰭第 5–6 棘基部付近まで上昇し、そこから尾柄部まで緩やかに下降する。体腹縁は下顎前端から腹鰭起部にかけて下降し、腹鰭から臀鰭起部までは体軸とほぼ並行で、そこから尾柄部まで緩やかに上昇する。口は端位で吻端は尖り、下顎前端が上顎前端よりわずかに突出する。上顎後端は円みを帯び、瞳孔前縁の直下をわずかに越える。両鼻孔は互いに接近し、吻上部の眼窩直前に位置する; 両鼻孔はともに円形で、前鼻孔には皮弁が発達する。両顎には配列が不規則な円錐歯帯があり、歯帯は顎の前部ほど幅広い; 円錐歯は内側にやや湾曲し、上顎前部では肥大する。鋤骨と口蓋骨に歯がある。前鰓蓋骨後縁の一部は細かい鋸歯状で、下縁はおおむね平滑。主鰓蓋骨棘は 3 本で、中央の棘が最も強大; 上方の棘はほとんどが皮下に埋没; 中央と下方の棘はいずれも先端のみ露出する。体はおおむね櫛鱗 (一部は円鱗) で被われ、両唇、吻部と眼窩の前縁、および胸鰭腋部は無鱗。側線鱗は管をもち、開口部は単一。肛門は背鰭第 9 棘基部のほぼ直下に位置する。尾柄はやや太短く、尾柄長が尾柄高の 1.6 倍。背鰭起部は鰓蓋後端の前方に位置する。背鰭棘条間の鰭膜は浅く切れ込み、背鰭軟条部の縁辺は円みを帯びる。背鰭棘は第 5 棘が最長。背鰭軟条は第 5 軟条が最長。胸鰭基底上端は背鰭起部直下の前方に位置し、胸鰭後縁は円みを帯びる。臀鰭起部は背鰭第 12 棘基部のほぼ直下に位置し、臀鰭軟条部の縁辺は円みを帯びる。臀鰭軟条は第 3 軟条が最長。腹鰭起部は背鰭起部直下のわずかに後方に位置する。たんだ腹鰭の後端は肛門に達しない。尾鰭は截形。

色彩 生鮮時 (Fig. 3) — 頭部の地色はくすんだ赤色で、体側の地色は赤橙色。両唇は赤色で頭部腹面は桜色。項部は赤褐色。眼窩は青褐色で縁取られる。体側中央部から後半部にかけて不明瞭な 3 白色横帯がある。背鰭の地色は赤褐色。背鰭棘条部の先端は暗赤色で軟条部の上半部は暗緑色。背鰭を除く各鰭の地色は赤色から赤橙色で、尾鰭の上縁は暗緑色。背鰭軟条部の上縁、腹鰭第 1 軟条の前縁、および臀鰭軟条部と尾鰭の後縁には白色の細い縁取りがある。

固定後 — 頭部はおおむね褐色で両唇と頭部腹面は淡褐色。体側は褐色から淡褐色。背鰭は褐色で棘条部の先端は黒褐色。臀鰭、胸鰭、および腹鰭は淡褐色で、胸鰭の後縁は白色の幅広い縁取りがある。尾鰭は中央部付近までがやや淡い褐色で、それより後方では淡褐色。尾鰭の上縁は褐色。

分布 本種はマダガスカルから日本、フランス領ポリネシアにかけてのインド・太平洋に広く分布する (Randall and Heemstra, 1991; Heemstra and Randall, 1993; Myers et al., 2011; Akhilesh et al., 2021)。日本国内では小笠原諸島、豆南諸島、高知県、大東諸島、口永良部島、トカラ列島、奄美群島、沖縄諸島、および石垣島から記録がある (瀬



Fig. 3. Fresh specimen of *Epinephelus retouti* (BSKU 138003, 271.5 mm SL) from Kochi Prefecture, Japan.

能, 2013; Kuriwa et al., 2014; 畑・本村, 2015; 木村ほか, 2017; Nakae et al., 2018; 桜井, 2019; Motomura and Uehara, 2020; 下瀬, 2021; 栗岩, 2022; 古橋・本村, 2022; 本研究). 鎢木 (2016) は種子島から本種を報告したが, Hata and Motomura (2021) によりシモフリハタ *Epinephelus rivulatus* (Valenciennes, 1830) に再同定されたため, 同島からの本種の記録はない.

備考 本標本は胸鰭軟条数が 19, 側線有孔鱗数が 72, 縦列鱗数が 118, 総鰓耙数が 22, 尾鰭が截形, 体に暗色点がない, 背鰭棘条部の上縁が暗赤色, および背鰭軟条部の上半部と尾鰭上縁が暗緑色などの特徴が, Randall and Heemstra (1991), Myers et al. (2011), および畑・本村 (2015) が示したアカハタモドキ *E. retouti* の標徴と一致したため, 本種に同定された. 本種の分布記録は前記のとおりであり, 本標本は本種の高知県からの初記録となる. また, 本種のこれまでの北限記録は, Kuriwa et al. (2014) が報告した豆南諸島の須美寿島であるため, 高知県宿毛市沖の島近海産の本標本は, 本種の分布の北限を更新する.

本標本の背鰭鰭条は 12 棘 15 軟条であり, 棘条数は本属の標徴である 11 から, 軟条数は本種の既知の変異幅である 16–17 からそれぞれ外れる (Randall and Heemstra, 1991; 瀬能, 2013; 畑・本村, 2015). しかし, 本標本は背鰭第 12 棘が他の棘条と比較してやや細く軟らかいこと, Randall and Heemstra (1991: table 2) により同属他種でも極めて稀に背鰭棘数が 12 の個体が存在することから, 本標本は奇形の個体であると判断した. 一方, シラヌイハタの備考でも述べたとおり, 本属の背鰭軟条は 2 本程度の変異幅があるため, 種内変異の可能性がある (Randall and Heemstra, 1991: table 2). また, 本種の背鰭棘条部の上縁を

除く背鰭は褐色から暗緑色で, 軟条部は棘条部よりも暗色であるとされるが (Randall and Heemstra, 1991; Myers et al., 2011), 本標本は棘条部が赤褐色で軟条部は暗緑色であるため該当しない (Fig. 3). しかし, Kuriwa et al. (2014: fig. 6f) が報告した個体 (NSMT-P 103169, 体長 330.7 mm) の背鰭も本標本とおおむね同様の色彩であることから, これを種内変異と判断した.

Randall and Heemstra (1991) や瀬能 (2013) などは本種の縦列鱗数が 120–141 としたが, 畑・本村 (2015: table 1) が報告した 4 個体では 106–112 であった. そのため, 本種の縦列鱗数の変異幅は 106–141 であり, 本標本もその範囲に含まれる (Table 1).

本種はおもに島嶼部の岩礁域やサンゴ礁域に生息し, 水深 20–220 m の範囲で確認されている (Randall and Heemstra, 1991; Heemstra and Randall, 1993; Myers et al., 2011; 瀬能, 2013). 一方, 本標本が釣獲された宿毛市沖の島近海は, 四国本土に近接する. 前記した分布のとおり, 日本国内では本土近海での本種の記録はこれまでになく, 本報告が初めてとなる. そのため, 当該海域では本種の生息数は極めて少ないと考えられる.

謝 辞

本報告の執筆にあたり, 香川淡水魚研究会の難波拓登氏, 高知大学農林海洋科学部の中村桐人氏と高知大学総合人間自然科学研究科 (当時, 高知大学農林海洋科学部) の西村颯人氏には, 貴重な標本をご提供いただいた. 熊本慧弥氏, 松永 翼氏, 饗場空璃氏をはじめ高知大学理工学部海洋生物学研究室の方々には, 研究活動にご協力いただいた. 鹿児島大学総合研究博物館の本村浩之博士には, 文献

をご提供いただいた。Ichthy 編集委員の中村潤平氏、匿名の査読者、および高知県林業振興・環境部の岡村恭平氏には、原稿の推敲や改訂に際し有益なご助言をいただいた。以上の方々に厚く御礼申し上げる。

引用文献

- Akhilesh, K. V., P. T. Rajan, N. Vineesh, K. K. Idreesbabu, K. K. Bineesh, M. Muktha, C. Anulekshmi, H. Manjebayakath, Y. Gladston and M. Nashad. 2021. Checklist of serranid and epinephelid fishes (Perciformes: Serranidae & Epinephelidae) of India. *Journal of the Ocean Science Foundation*, 38: 35–65.
- 荒井孝友・佐藤 崇. 2021. 三重県南部から得られた本州初記録のシラヌイハタ. *魚類学雑誌*, doi: 10.11369/jji.21-004 (June 2021), 68: 151–155 (Nov. 2021).
- Cornish, A. S. 2011. *Epinephelus fuscoguttatus* (Forsskal 1775), pp. 142–144. In Craig, M. T., Y. J. Sadovy de Mitcheson and P. C. Heemstra. (eds.) *Groupers of the world. A field and market guide*. NISC, Grahamstown.
- Fujiwara, K. and H. Motomura. 2020. An annotated checklist of marine and freshwater fishes of Kikai Island in the Amami Islands, Kagoshima, southern Japan, with 259 new records. *Bulletin of the Kagoshima University Museum*, 14: 1–73.
- 古橋龍星・本村浩之. 2022. トカラ列島の無人島、臥蛇島と小臥蛇島における魚類 57 種の記録. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 23: 7–18.
- 畑 晴陵・小枝圭太・鎬木紘一・高山真由美・本村浩之. 2016. 鹿児島県から得られたハタ科魚類 3 種: サラサハタ, アカマダラハタ, およびオオスジハタ. *Nature of Kagoshima*, 42: 147–156.
- 畑 晴陵・本村浩之. 2015. 薩南諸島から得られたハタ科魚類 2 種: アカハタモドキ *Epinephelus retouti* とヤマブキハタ *Saloptia powelli*. *鹿児島大学水産学部紀要*, 64: 1–9.
- Hata, H. and H. Motomura. 2021. First record of the grouper *Epinephelus rivulatus* (Teleostei: Serranidae) from the Tokara Islands, northern Ryukyu Archipelago, Japan. *Fauna Ryukyuna*, 61: 9–13.
- Heemstra, P. C. and R. F. Myers. 2011. *Epinephelus bontoides* (Bleeker 1855), pp. 95–96. In Craig, M. T., Y. J. Sadovy de Mitcheson and P. C. Heemstra (eds.) *Groupers of the world. A field and market guide*. NISC, Grahamstown.
- Heemstra, P. C. and J. E. Randall. 1993. *FAO species catalogue. Vol. 16. Groupers of the world (family Serranidae, subfamily Epinephelinae). An annotated and illustrated catalogue of the grouper, rockcod, hind, coral grouper, and lyretail species known to date*. FAO, Rome. viii + 382 pp. + xxxi pls.
- 鎬木紘一. 2016. 種子島の釣魚図鑑. たましだ舎, 西之表. 157 pp.
- 木村祐貴・日比野友亮・三木涼平・峯 健・小枝圭太 (編). 2017. 緑の火山島 口永良部島の魚類. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 200 pp.
- Koreeda, R. and H. Motomura. 2025. An annotated checklist of marine and freshwater fishes of the Koshiki Islands and adjacent waters, Kagoshima, southern Japan, with 353 new records. *Bulletin of the Kagoshima University Museum*, 21: 1–119.
- 栗岩 薫. 2022. マハタ属, pp. 234–237. 中坊徹次 (編) 小学館の図鑑 Z 日本魚類館 (第 6 刷 補訂). 小学館, 東京.
- Kuriwara, K., H. Arihara, S. N. Chiba, S. Kato, H. Senou and K. Matsuura. 2014. Checklist of marine fishes of the Zunan Islands, located between the Izu and Ogasawara (Bonin) islands, Japan, with zoogeographical comments. *Check List*, 10: 1479–1501.
- 栗岩 薫・原崎 森・瀬能 宏. 2008. 日本初記録のハタ科魚類シラヌイハタ (新称) *Epinephelus bontoides*. *魚類学雑誌*, 55: 37–41.
- 三木涼平. 2021. シラヌイハタ, pp. 128–129. 村瀬敦宣・緒方悠輝也・山崎裕太・三木涼平・和田正昭・瀬能 宏 (編) 新・門川の魚図鑑: ひむかの海の魚たち. 宮崎大学農学部附属フィールド科学教育研究センター延岡フィールド, 延岡.
- 本村浩之. 2009. 魚類標本の作製と管理マニュアル. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 70 pp.
- Motomura, H. 2023. An annotated checklist of marine and freshwater fishes from Tanaga-shima and Mage-shima islands in the Osumi Islands, Kagoshima, southern Japan, with 536 new records. *Bulletin of the Kagoshima University Museum*, 20: 1–250.
- 本村浩之. 2026. 日本産魚類全種目録. これまでに記録された日本産魚類全種の現在の標準和名と学名. Online ver. 40. [URL](#)
- Motomura, H. and K. Uehara. 2020. An annotated checklist of marine and freshwater fishes of Okinoerabu Island in the Amami Islands, Kagoshima, southern Japan, with 361 new records. *Bulletin of the Kagoshima University Museum*, 12: 1–125.
- Myers, R. F., D. A. Pollard and B. M. Yeeting. 2011. *Epinephelus retouti* Bleeker, 1868, pp. 222–224. In Craig, M. T., Y. J. Sadovy de Mitcheson and P. C. Heemstra (eds.) *Groupers of the world. A field and market guide*. NISC, Grahamstown.
- Nakae, M., H. Motomura, K. Hagiwara, H. Senou, K. Koeda, T. Yoshida, S. Tashiro, B. Jeong, H. Hata, Y. Fukui, K. Fujiwara, T. Yamakawa, M. Aizawa, G. Shinohara and K. Matsuura. 2018. An annotated checklist of fishes of Amami-Oshima Island, the Ryukyu Islands, Japan. *Memoirs of the National Museum of Nature and Science, Tokyo*, 52: 205–361.
- 中村潤平. 2022. ハタ科 Serranidae, pp. 90–103. 岩坪洗樹・伊東正英・山田守彦・本村浩之 (編) 薩摩半島沿岸の魚類. 鹿児島水圏生物博物館, 枕崎・鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島.
- 中村潤平・伊東正英・本村浩之. 2019. 薩摩半島西岸から得られた分布北限記録のシラヌイハタ. *Nature of Kagoshima*, 45: 221–224.
- 中村潤平・前川隆則・本村浩之. 2021. 奄美大島から得られた奄美群島初記録のアカマダラハタ. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 13: 1–3.
- 中村潤平・本村浩之. 2022. ハタ科 Serranidae とされていた日本産各種の帰属, および高次分類群に適用する標準和名の検討. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 19: 26–43.
- 中村潤平・本村浩之. 2025. 日本におけるヒレナガハタの分布記録の再検討. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 58: 72–75.
- 中村潤平・桜井 雄・本村浩之. 2025. シラヌイハタの沖縄県と静岡県からの初めての記録, ならびに分布の北限更新記録. *Fauna Ryukyuna*, 77: 27–31.
- 中村潤平・和田英敏・藤原昌高・本村浩之. 2026. 九州西部から得られた日本初記録のハタ科魚類ミナミクエ *Epinephelus randalli*. タクサ: 日本動物分類学会誌, 60: 54–59.
- Parenti, P. and J. E. Randall. 2020. An annotated checklist of the fishes of the family Serranidae of the world with description of two new related families of fishes. *FishTaxa*, 15: 1–170.
- Randall, J. E. and P. C. Heemstra. 1991. Revision of Indo-Pacific groupers (Perciformes: Serranidae: Epinephelinae), with descriptions of five new species. *Indo-Pacific Fishes*, 20: 1–332, pls. I–XLI.
- 桜井 雄. 2019. ハタ科 Serranidae (ハタ亜科), pp. 84–95. 本村浩之・萩原清司・瀬能 宏・中江雅典 (編) 奄美群島の魚類図鑑. 南日本新聞開発センター, 鹿児島.
- 笹木大地. 2025. アカハタ属, pp. 279–287. 木村清志・笹木大地 (編) 美し国の魚たち 三重県の魚類図鑑. 木村清志, 伊勢.
- 笹木大地・武藤 滉・中村潤平・日比野友亮・木村清志. 2025. 三重県におけるハタ科魚類相. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 55: 30–48.
- 瀬能 宏. 2013. ハタ科, pp. 757–802, 1960–1971. 中坊徹次 (編) 日本産魚類検索 全種の同定. 第 3 版. 東海大学出版会, 秦野.
- 下瀬 環. 2021. 沖縄さかな図鑑. 沖縄タイムス社, 那覇. 207 pp.
- 橘 皆希・遠藤広光. 2023. 高知県と静岡県から得られたハタ科アカハタ属魚類 5 種の記録. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 39: 14–25.
- 吉郷英範. 2026. 庄原市立比和自然科学博物館収蔵のハタ科, アラ科, ハナダイ科魚類 (硬骨魚綱スズキ目). 比和科学博物館研究報告, 67: 27–43.